〔書　評〕

『新撰字鏡の研究』

貞苅伊徳著

内田賢徳

一

『新撰字鏡の研究』と題する本書は、貞苅伊徳氏の遺著である。全体は第一部と第二部とに分かたれ、それぞれ次のように構成されている。

第一部

玉篇と篆隷万象名義について

新撰字鏡の解剖〔要旨〕――その出典を尋ねて――

新撰字鏡の解剖〔要旨〕付表(上)

新撰字鏡の解剖〔要旨〕付表(下)

『新撰字鏡』〈臨時雑要字〉と『漢語抄』

『大般若経音義中巻』と『新撰字鏡』

世尊寺本字鏡について

世尊寺本字鏡について(補稿)――京大本字鏡抄無名字書との関係――

注文から見た字鏡鈔・字鏡集の考察

第二部

日本の字典――『篆隷万象名義』『新撰字鏡』『類聚名義抄』――

観智院本類聚名義抄の形成に関する考察　その1　字順をめぐる問題

「新撰字鏡」抄録本の異本としての一面――その祖本は原本に近かったか――

以上の内容に、「はしがき」と題する築島裕氏の序文と、そして末部に池田証寿氏の解説「貞苅伊徳著「新撰字鏡の研究」解説」(以下「解説」)があり、更に村井有子氏(貞苅氏次女)の「あとがき」、そして「著者略歴」が付される。以下、新撰字鏡を中心に、思うところを記してみたい。

第一部は、新撰字鏡の分析とそれを他の字鏡集などに応用した字書論である。就中「新撰字鏡の解剖」と題され『訓点語と訓点資料』誌上に発表された論文とその付表は、新撰字鏡に関する研究を根柢から作り上げた、画期的な、もとより氏の研究を代表する論文である。

「新撰字鏡の解剖〈要旨〉」は、古辞書研究が、それまで書誌と系統、そして倭訓中心とした内容であったのを根柢から変える斬新さをもっていた。その位置づけは池田氏の「解説」に尽くされ、特に付加すべきこともないが、それを参考に少しく振り返っておきたい。

昌住が新撰字鏡十二巻をどのように編んだかについては、序文からそのあらましをたどることができる。玄応音義を見出し字の部首別に分けた索引本のような形態を企画し、その後玉篇、切韻を得て増補し、また小学篇その他で補足したというのがそれである。というと、玄応音義を核とした形態が想像されるが、その整いはなく、引用された諸篇は極めて雑然と混在している。まず成ったという玄応音義を基とした三巻が索引本のようであった形跡はなく、むしろ昌住個人や宗派の要に応じた、特定の経典に偏りをもつ抄出であったというのが後の研究で明らかとなっている（池田証寿「玄応音義と新撰字鏡」）。その混在の中で、貞苅氏がまず注目するのは、幾つかの形式で明示される切韻を出典とする部分である。広韻との対比を手掛かりに、四声表記の規則的に現れる部分が四つの型をもち、切韻を出典とすることが明らかにされる。次に玉篇を出典とする部分の析出であるが、ここでは萬象名義と標字の配列順を照合することで、玉篇による部分がそれぞれの群として抽出されてくる。残る玄応音義については、注文の一致度を手掛かりに出典としての箇所が指摘される。その解析の過程は、一つの推理と称してよいような明快さと刺激に満ちている。読み終わって初めて、「解剖」と題される所以を我々は知ることになる。人体を注意深く切り開いて、かつて腑分けと言われたことのように、その内容を小さな器官に至るまで精密に整理し、それらが有機体としてもっていた入り組んだ関係を解明する基礎を作ること、ここにあるのはまさに「解剖」と称すべき営為である。その結実と言える「付表」は、新撰字鏡の解剖図であり、そして古辞書研究のターヘル・アナトミアとなった。「悉皆調査」（解説）という、細部の厳密な分析が、ともすれば陥りがちな単に煩瑣なだけという事態になってしまうことなく、常に「出典群の抽出」（同）という目的のもとにきちんと統御され、構造が解明されている。新撰字鏡の出典研究は、この論文の後、切韻についての故上田正氏の『切韻逸文の研究』、玉篇についての井野口孝氏の「新撰字鏡『玉篇群』の反切用字」、そして玄応音義についての池田証寿氏「玄応音義と新撰字鏡」を主なものとして、継承・展開され、より詳細に昌住の営為が明らかになっている。貞苅氏自身も、その後「『新撰字鏡』〈臨時雑要字〉と『漢語抄』」、「『大般若経音義中巻』と『新撰字鏡』」の二篇によって、出典研究を更に進めている。そのうち、前者については、新撰字鏡以前の上代字書の類への視点を得て、新しい展開を思わせる。この論文は『国語と国文学』六十巻一号（昭和五十八年一月）に掲載されているが、着想はより以前（昭和三十六年国語学会発表）にあった。新撰字鏡巻十二「臨時雑要字」とは、「臨時雑要」という資料によることを推定し、

そしてこの呼称から酌みとれるところは、いずれかといえば、

公式の漢文規格には関わらない記録に用いられる日常的な雑用の字が載せてあって、それは必要に応じて参看するように用意されたものであることを表示したものの如くである。それは常用文字の日本語読みや表記法を学ぶ教科書としての列次的役割をも荷った一面もあったろうけれども、本来的には日本語を漢字で書き記そうとするとき、ことばから文字を捜し出すために利用された用字字書であった。それが〔臨時〕といい、〔雑要〕と呼んだ由縁の意味するところではあるまいか。

と、その性格が規定される。右の一文、現在研究の盛んな上代の文字表現の分野にとって注意してよいものである。少し補足すれば、「臨時雑要」は、語の語形も意味も分かっていて、つまり仮名では書けて、それにふさわしい訓字を捜す時の実用字書であったということである。なお「臨時」は、一時、とりあえずの意ではなく、その時その時に応じてという意で、萬葉集巻七にみえる「臨時」という題詞も同じ用法。「雑要」の雑は、いわゆる雑用というそれとは異なって、くさぐさの意、つまり「雑歌」の雑と同じ意である。「臨時雑要」は、時に応じて種々の要を満たすといった意味合いの称であろう。上代の文章法と文字についての最近の問題の一つに、実用的な文字の使用ということがある。音義木簡とこの「臨時雑要」とはまだ遠いけれども、文字使用の実態ということからのつながりを跡づけられたら有意義であろう。貞苅氏によって「小学篇」などについての分析がなお続いたらと惜しまれる。

字鏡についての論考は新撰字鏡についての論考より発表が早いが、取られている方法は、新撰字鏡についての方法と共通している。実際の順とは違うかも知れないが、新撰字鏡についての方法が字鏡類の研究にも活かされていると言ってよいであろう。『本邦辞書史論叢』に載る「注文から見た字鏡鈔・字鏡集の考察」が、字鏡研究の基礎的文献であることは周知であろう。まさに、「鎌倉時代以前の古辞書のほとんどを研究対象として取り上げて、それらを自在に論じることのできる研究者は数少ない」（解説）という状況の中で、精密な分析を重ねて対象の解明を果たす、国語史研究の正統的なあり方が本書を貫いている。目を瞠るようなあざやかな手際があるのではない。研究がいつしか、辞書を編んだ古人たちの努力への共感を生み、それがまた研究を支えて展開している。そしてその軌跡が、同様の研究に携わる者の共感を生んで行くのである。

第二部は、講座執筆の一篇と、論文として発表されていない研究発表二篇の資料を収める。「日本の字典」は、漢字講座2『漢字研究の歩み』中の概説である。懇切な解説は、貞苅氏の多年に亙る古辞書研究の粋（エッセンス）が発揮されていて、この種の概説では最も読みごたえのある好篇である。中に小さく印刷された覆製本の紹介は、時に辛口で、かつ使用者に優しい案内となっている。これらに付される索引についての、本書「解説」にも引かれる一節は、後進の箴言とすべきことを語りかける。

本書巻末の「著者略歴」によれば、最後のこの著述の発刊（一九

八九年八月）を待つことなく、その九か月前著者は他界した。

二

故人となった著者の書を編むことには、独特の困難がある。本書の刊行に至るまでの築島裕、池田証寿両氏の労は、想像に余りあると言わねばならないだろう。ただ、私にも一度故人の著作を刊行することを手伝った経験があり、その乏しい経験からだが、気のついたことを記してみたい。

故人である著者が、もし生前にその書を著そうとしたら、どんな内容や形式を望んだか、故人の書を編む立場がまず考えることであろう。その案が成っても納得はなかなか訪れない。これでよいのかという不安は、まるでそれが故人への誠実の証しであるかのようにつきまとう。それはそのまま正確さへの懸念となる。原論文に誤植がある。それは訂すべきであろう。年月などの数値に誤りがある。それも訂してよいだろう。そうした限度をどこに置くのがよいのか、基準などない。むしろすべては故人と編者の間柄に委ねられていると言った方がよい。

その点で、本書の各章のうち、「注文から見た字鏡鈔・字鏡集の考察」と「日本の字典」の二篇が、それぞれの掲載された刊行書の版のままに印刷されていることは、そうした懸念を考慮した、一つの方途だと思う。ただそのために、原論文の誤植はそのまま残り、また表の指示頁が本書の頁と合わなくなる（本書二四九、二五一頁）という瑕疵が残る。もちろん理解に困るような不都合はないが、もし工程上可能なら調整してもよかったのではなかろうか。

右の二篇以外の諸篇は、すべて池田氏の手によってワープロで入力されたものである。「明らかな誤記・誤植は訂正する」とあり、単なる入力（それでも大変だが）でなく、内容についての判断がいくらかあったことが知られる。しかし、この判断をどの程度行うか、迷いもあっただろうと推測する。原論文で「反物」とあった箇所が「反切」と訂されていることなどが目についた。

この作業は、パソコン入力によって得られる多大の便を考えれば、殊に新撰字鏡の研究において、本書の刊行を超えた成果を与えることになろう。『訓点語と訓点資料』第十四輯、第十五輯（昭和三十五年十月、三十六年一月）に掲載された「付表」は、手書き、ガリ版刷であったが、本書収録に当たって、池田証寿氏によってワープロ入力されている。二千字を超える外字の作成に数年を費やされたと「はしがき」に紹介されているその営為は、すべてを鉄筆と呼ばれた用具で文字通り鑽る作業のそれと異質に、しかし等価に、一つ一つの字体を実現させる労苦に満ちている。字形の個々を部分に分解することによって成り立つそれがいかに困難かは、外字作りを少しやってたちまち挫折してしまった私にも想像できる。天治本の字体には判別し難いものが幾つもあり、個々の字形をどの字体に同定するかということも作業の一部となる。その点で、右の二つの方法は微妙なちがいをもつことになる。貞苅氏の手書きは、天治本の字形を忠実に写すことを心掛けてあるように見える。「新撰字鏡の解剖〔要旨〕」にあげられる萬象名義と

の対比表でも、天治本の字形が忠実に写され、萬象名義の、やはり忠実に写された字形と微差をもつ。手書きということは、それを可能にする。しかし、ワープロによる分解と合成では、そのやり方はまず不可能であろう。字形の各部分はすべて曖昧なままにおくことができず、何らかの形へと整えられなければならない。二つのちがいはアナログとデジタルの差と言ってよい。もともとこの「付表」は、新撰字鏡の各項の出典を網羅的に解析することに主眼があり、個々の字体はすべて同定されなければならないということはない。場合によっては柔軟でありうる。しかしワープロによる作字という作業は、字体の同定を不可避のこととしてしまう。分かり易い一例をあげれば、部首の「矛」は天治本でこの標準的な字体ではない。手書きはそれに倣い、ワープロは「矛」に置き換える。もちろん二つの措置は実質的なちがいをもたない。繰り返すが字体の同定をするかどうかは、この「付表」の活用にあまり関わらない。ただ、長島豊太郎『古辞書綜合索引』が、部首としては標準字体をあげ、見出字には「矛」に並べて天治本の字体をあげて区別するのを参照する時、手書きとワープロのちがいは、字体に対する態度のちがいとして了解されねばならないことを導く。同定という判断を不可避にすることで、本書の「付表」は、『訓点語と訓点資料』誌のそれより進んだ要素を含んでいることになる。池田氏の文字研究と関わる面もあろう。その差は新撰字鏡を扱う上での、今後の方向にも示唆的である。逆に言うと、本書の「付表」があれば手書きの旧版は不要なのではない。本書の「付表」の幾つか訂正すべき箇所（気づいたものでは「冂部」→「亠点部」八六頁）を正したうえでもなお、手書版を参照すべき場合があるように思われる。

三

本書の中心をなす新撰字鏡についての研究は、前述のように古辞書研究の分野で継承され、それらの基礎としての価値を不動のものとしている。今後の更なる継承と応用はいかになされるべきか。倭訓中心から注文全体の研究へというところに本書の基本的な立場があった。しかし、この内容は、注文の批判を通して倭訓の解明にも応用されうる。一例に過ぎないが、注文の批判と併せて、応用の一端を示してみたい。

「付表」で玉篇によるとされる部分に、次の項がある。

擲　雉戟反、入、投也、掻也、振也

擿　上同　（天治本巻十12オ1）

標出字は「擲」である（以下、これに限らず便宜上標準字体であげる）。「擿」は、巻十8オ4にもあって、

擿　正、知戟反、入、投也、格也、振也、取菓也、借、耻革反、入、剔治也

とある。この項は抄本にもあり、

擿摘　同、知戟反、投也、掻也、振也、取菓也、借、耻革反、剔治也、謂垂手持提也　加久（享和本、久原旧蔵本）

とあって、こちらは倭訓を付す。天治本のこの項は、「付表」で出

所不詳とされる。これらを手掛かりに、注文の批判を試みる。

まず、「擲」だが、「付表」が玉篇による部分とするのは、11ウ5「捥」から14オ8「捺」までの部分が、一、二の例外を除いて萬象名義の字順に合致していることによる。しかし萬象名義には新撰字鏡で両字の前後「摜」と「搾」は見られるが、その中間に「擲、擿」共に掲出字として見出されず、「付表」の玉篇によるという基準に合致しない。大広益会玉篇（択存堂本）では、

擿　雉戟切、投也、荘子曰、擿レ玉毀レ珠　擲　同上

とみえるが、周囲の字順は萬象名義、新撰字鏡と全く異なり、新撰字鏡が引いた玉篇（萬象名義と近い字順のもの）とは、この場合対応しない。しかし、「擲、擿」が玉篇にあったことは、次の佚文によって明らかである。

擲　玉、短戟反、説文、擿、投也、一曰、掻也、廣雅、擿、振也、又音恥革反、野王案、擿、猶剔也、亦音他狄反、

擿字　（大乗理趣六波羅蜜経釈文所引）

反切の「短戟反」は、むしろ新撰字鏡によって「雉戟反」と訂すべきであろう。恐らく、現存萬象名義には漏れているこの標出字のある玉篇を昌住は見たのであろう。しかし、それだけで問題は尽きない。「付表」が玉篇によるとするここの群のうち、この項が唯一四声を記していることをどう扱ったらよいのか。玉篇によるのでないことは確かだが、一方、切韻の諸佚文に当たっても、入声ではあっても韻が異なる。ここで「付表」が出典を掲げる時、その方法が、切韻、玉篇とも群として抜き出すことにあったことが想起される。群の内部で配列の法則性をもたない、恣意的な項は、群として出所不詳とせざるを得ない。「扌部」冒頭からの出所不詳群には、四声を記した項が見られる。それが何に基づくか、明らかでないが、その中の「擿」に付された入声の注が、玉篇から引いた「擲」の項で改めて付されたのだろうか。その点「付表」のより一層の精密化ということは、困難を抱える。

ただ、右のように「付表」を利用した注文の批判を行うことによって、注文の内容が明らかになるという効果が得られる。それは倭訓の問題にも及ぶ。「擿」が玉篇によることから、「天治本『挌』は『掻』の訛か、説文に『掻也』と見ゆ」（山田『攷異』）という判断は確かなものとなる。そして抄本の倭訓「加久」は、この訓義に対応することになる（「加久、按加々久之誤」という『考』の判断は語義が異なる）。「掻」がカクであることなど自明かも知れないが、天治本が「挌」（うつの意）に作るのは、「擿」にもうつの意があるから、強ち誤りと言えない面がある。玉篇と比較することによって、初めて「掻」としうる。倭訓カクは、新撰字鏡でもう一例見られる。

抓　側交反、爪刺也、掻也、又側考反、掐也、刮也、豆女乎毛天加久、又豆牟　（天治本巻十9ウ4）

「以下出従切韻四声字」と括られるうちの「平声」に属する。この項、抄本には

抓　側交反、掐也、爪刺也、刮也、掻也、豆牟（久原旧蔵本）

とあって異なるが、反切を区別する天治本の方は、広韻の、「抓　側

交切、抓掐」（平声肴韻）「抓　側教切、爪剋也」（去声効韻）と訓義が整合しない。どこかで混乱したのだろうが、よった切韻が広韻と同じような区別をもっていたのだとしたら、抄本の「爪剋也」の上に反切「側考反」のある形が原形であったと考えられる。この項の「刮也」と「掻也」は、上田正氏によって、玉篇から引いたとされる箇所である。追加された玉篇部分が抄本のようにあったのを、天治本が二つに分けているのは、反切と訓義が齟齬していることとも関わろう。萬象名義には、

抓　荘絞反、掐也、刮也、掻也

とある。たった一例に過ぎないが、本書第二部の研究発表レジュメ「『新撰字鏡』抄録本の異本としての一面――その祖本は原本に近かったか――」が推定する、天治本は原撰本にある種の操作の手が加わった部分をもつ本だということの延長上の現象のようにも見える。切韻に玉篇を追加する方法は、それこそ「悉皆調査」で再検討して考えるべきだが、一つの試案として右の例を解することができる。そして、今一つ、玉篇佚文に、

抓　掐也、刮也、爪之掻〻物曰〻抓、音荘狡反、非二指爪一

（慧琳音義所引）

とあることを参照すれば、萬象名義と新撰字鏡の「掻也」は「爪之掻〻物曰〻抓」の抄出に他ならず、また倭訓「豆女乎毛天加久」は、まさしく玉篇のこの部分を訓読した結果であると言えよう。

右の推定は、「付表」に始まる新撰字鏡の解剖所見に基づいてその病歴を解読する試みである。そして倭訓も、この解剖所見と密接に分析され、解明されなければならないことが分かる。

四

以上、本書についての一つの読み方を記した。もうこれ以上述べる必要はあるまい。しかし、私は評者として、どうしてもこの著者の経歴にふれずにはいられない。巻末の「著者略歴」に見る限り、そこにいわゆる高等教育はない。職歴においても研究職に就かれたことはなく、電電公社（現ＮＴＴ）の社員であることを全うされた、その意味では在野の研究者と一般に称される人であったことになる。だが、辿ってきたように、本書にはその「在野」という称から連想されるような、方法の恣意ということも、それ故の高ぶりや不要な卑下といった屈折も全く見られない。一面識もない私だが、そこに一つの人柄を思ってしまう。「はしがき」に、築島裕氏と著者との、発表をめぐっての逸話が記されている。訓点語学会での築島氏の発表内容について、著者から、十年前に既に国語学会で自分の発表した内容と重なる旨の指摘が休憩時間中にあり、築島氏がその発表を撤回されたという一件である。この種のことはトラブルとして時折耳にする。抗議と弁解、反論といったことが公開の場で展開されることもある。著者の「温厚な御配慮」と「はしがき」に感謝が記される、その態度のなかで著者にあったのは、憤慨であるより、むしろうれしさのようなことだったと想像する。内容の重なりは無視であるよりは、自説の築島氏による追認であるのだから。本書を貫いている純粋さに、その

うれしさはふさわしい。撤回という潔さは、同年生まれの二人の魂の振れあひのように感じられる。

しかし、その純粋な「篤学」（はしがき）の持続することがどれほど困難であったか。「記憶の中の父は、いつも書斎で本に囲まれて座っています。在職中は仕事から帰宅するとすぐ……」（あとがき）。本書に「数多くの方々の学恩ご助力とご叱咤」（二六七頁）と記される支えはあったにしても、無縁の職務の合間に、時間を縫い綴るようにして続けられたであろうこの稀有な研究を思うとき、この仕事に就いた者は誰でも或る感慨をもつであろう。ただ、その感慨の中で、本書を貫く純粋さの、まさしくそれ故に、この研究が「解剖」を継承した論考を再吸収して大きくなるような強さにつながらなかったことも指摘しておかねばならない。――それは、但し「六十三歳といふ、今時にしては余りにも早い御逝去」（はしがき）ということとも関わろう。早い死を準備したものが何であったか、私は知らない。けれども、幾重にも限られた時間の中で、つまりは純粋である以外になかった環境で達成された研究であることを考えるべきであろうと思う。

見事に美しい字書論としての本書はまた、研究しつつ生きることの鑑でもある。

（一九九八年一〇月一四日発行　汲古書院刊　A5判　三五二ページ　本体価格九五〇〇円）

――京都大学教授――

（二〇〇一年四月一七日　受理）